

■ 研究論文

北京市における現代芸術の場としての芸術区の変遷

Transition of Art District in Beijing

章 璐* 黒田 乃生**

Lu ZHANG Nobu KURODA

Abstract : One important aspect of production and sale of Chinese contemporary art, which started in 1979, is that it involves government criticism. However, the situation has started to change since 2006, when the Chinese government made the contemporary art as a part of 'Cultural creative industry'. The 'Art districts' in Beijing are the places where works of contemporary art are produced, exhibited and sold. The purpose of this paper is to consider the directionality of 'Art districts' from now on, which is based on transition, in the situation that consumption of art is accelerating as 'industry' in Beijing. The results show that the art districts spread to the city area from northeast Beijing. And also, an important change has occurred to facilities and activity in '798 Art District' because the management subject changed. This paper appeals the Chinese government and the enterprises to make the role clear as management organizations, and consider the management policy of the Art districts, which can be suitable for Chinese contemporary art.

Keywords : Chinese Contemporary Art, Art Districts, Beijing

キーワード：中国，現代芸術，芸術区，北京市

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

中国の現代芸術は1979年に開催された「星星画会」による展覧会が原点で、「芸術の自由と政治の民主」を求める活動は当時の政府によって監視、規制された。その後1985年のいわゆる「八五美術運動」で中国全土に爆発的な広がりを見せ、「制度化された『美術館』からアートを解放した」とされている¹⁾。1989年の天安門事件以降、作家たちは中国国内ではアンダーグラウンドで活動を継続し、中国の現代芸術が国外で高い評価を得るようになった。その結果、2006年には経済的な効果を期待した中央政府は現代芸術を「文化創意産業」として位置付け政策的な支援をするようになった²⁾。中国の現代芸術はその起源からも政治的なメッセージを包含するものが中心であり、芸術の制作や販売は政府への批判を伴えば規制を強くうけることになるため³⁾、中国政府が現代芸術を支援することは矛盾をはらんでいたとも言える。

このような中国の現代芸術と深い関わりがある空間が「芸術区」である。北京市に始まった「芸術区」は作品を制作、展示、販売する場所であり、上海、成都、広州、深圳など中国全土に存在する。「産業」として芸術の消費が加速する状況の中で、「芸術区」が現代芸術の場としてどのような役割を果たし、今後どのように展開していくことが望ましいのか検討する必要がある。

中国の芸術区に関する既往研究として、大岡らは北京にある芸術区5ヶ所の事例の概要を紹介し⁴⁾、王は観光地として「798芸術区」のイベントを紹介し経済効果について考察しているが⁵⁾、いずれも概要を述べるにとどまっており、変遷や位置づけを明らかにしたものではない。中国現代芸術については牧の一連の著作があるが、芸術区を対象にしていない⁶⁾。

これらの既往研究を踏まえて本研究は、北京市を事例に芸術区の変遷を明らかにし、今後の中国における芸術区のあり方について考察することを目的とする。

研究の対象は最初に芸術区が形成された北京市の芸術区と、そ

の中でも作家が自発的に集まって形成され、ギャラリーが進出するなど多様な施設がある「798芸術区(798 Art Zone)」とする。2012年に開催された北京市によるイベント「画廊活動週間」に登載された82の施設のうち、約半数の40件が798芸術区の施設で、もっとも多かった。このことからわかるように、798芸術区は北京市の芸術区の中でも、現代芸術に関する活動が最も盛んであり現存する芸術区の中では歴史があり事例としてふさわしい。なお、「芸術区」の定義は明確でなく、「画家村」「芸術家聚集区」などの名称が用いられることもあるが⁷⁾、本研究では現代芸術を中心に、制作、販売、展示などの芸術活動が展開し、運営されているまとまった地区を「芸術区」として研究の対象とする。

(2) 研究の方法

研究の方法は文献調査による。北京市の芸術区の変遷と現状については資料および新聞記事、ウェブの記事から把握した。また対象とする「798芸術区」については「798芸術区」に関する芸術関連の雑誌記事及び資料を用いた⁸⁾。雑誌記事は発行年と内容によって分類し、内容の変遷を把握した。さらに、利用状況と運営に関しては資料調査のほかに、補足として現地調査および関係者12名⁹⁾への聞き取り調査を実施した。

2. 北京市における芸術区の変遷

(1) 概要

本研究で対象とする現代芸術を扱う芸術区は北京に31ヶ所(うち5ヶ所は廃止)ある。図-1は北京市の芸術区の数の推移である。2006年に6ヶ所、2007年は5ヶ所とこの2年間にできたものが全体の約4割を占める。これは北京市が2006年に「文化創意産業」に力を入れたことがきっかけで芸術区が乱立したものである¹⁰⁾。現在これらの芸術区は「文化創意産業園区」の一部として管理されている。政府の関与がはじまる前の2005年以前と2006年以降で芸術区の概要を比較したのが表-1である。2005年までにできたものが11ヶ所、2006年以降2013年までが15ヶ

*筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程世界文化遺産学専攻 **筑波大学芸術系

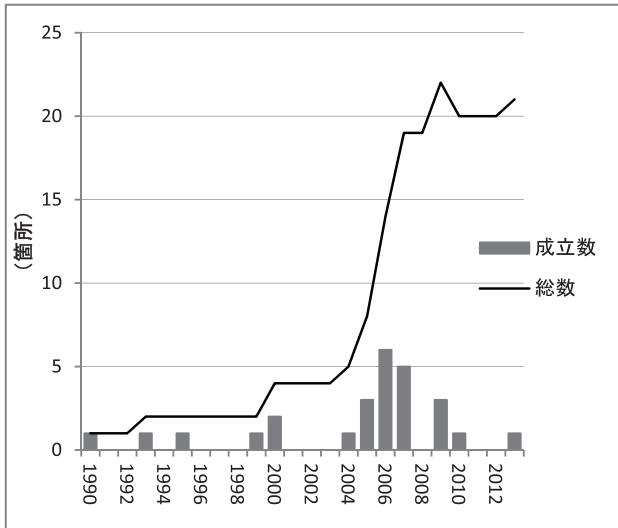


図-1 北京市における芸術区の成立数の推移

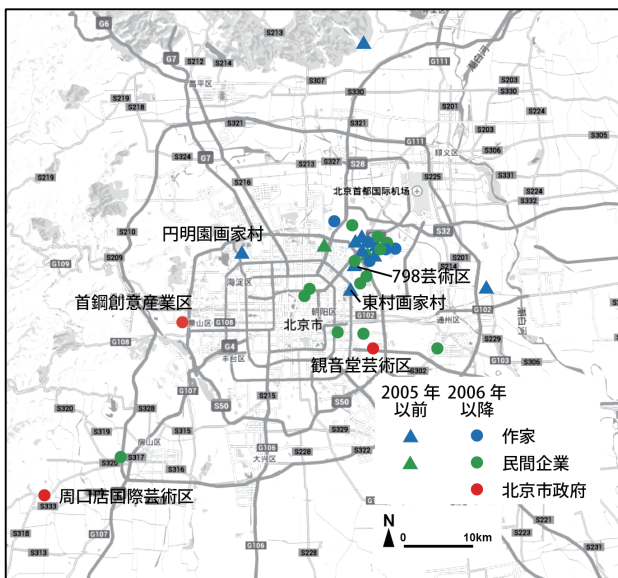


図-2 北京市における芸術区の分布

所であり、そのうち廃止されたものは5ヶ所である。1990年代の芸術区の解散の要因は後述のように政治的な理由だった。一方、2000年以後は都市開発の影響や、土地の不法利用の摘発が原因とされている¹¹⁾。民間企業が開発した008国際芸術区および創意正陽芸術区(ともに2007年成立)はこの理由で2010年に解散している。創意正陽芸術区では周辺地区の再開発のために、立ち退きを拒んだ芸術家が襲われる事件があった¹²⁾。

(2) 形成要因

(i) 形成要因の概要

31ヶ所の芸術区は、形成過程から三つに分類することができる。作家が自発的に集まって形成された芸術区(13件)、民間企業が開発した芸術区(11件)、政府が計画し開発した芸術区(3件)である。

作家が自発的に集まったものなかで、もっとも古い芸術区は1990年の円明園画家村で、1993年には東村画家村が成立した。これらはもともと現代アートのパフォーマンスの場として、民家や屋外で活動が展開されていた。こうした民間の現代芸術の活動が政府に認められず、その後円明園画家村は1995年に、東村画家村は1990年代末にともに解散している。過激なパフォーマンス・

アートが展開された東村は作家の逮捕などによって解散に追い込まれ¹³⁾、円明園画家村では1995年に「社会的不安定要素の排除」や「人口移動の管理(流入制限)」などの理由によって、画家が本籍地へ強制送還または北京市公安に収容され、その後北京市政府によって解散されたことはその後の中国の現代芸術に大きな影響を与えたとされている¹⁴⁾。

民間企業が開発した芸術区は酒廠芸術区、環鉄芸術区が2005年と最も古い。酒廠芸術区は北京英誠科貿發展有限会社という民間企業が開発し、2005年にオープンした¹⁵⁾。しかし、交通の便が悪いことや知名度が低い等の要因で多数のギャラリーが移転したため、開発者の朱超英によると、「ギャラリーは798芸術区に移転したため、アトリエや設計事務所だけでなく『酒造』を再開し、芸術区の土産物として酒を生産・販売するなど管理方針を転換した」という¹⁶⁾。北京酷房国際芸術有限会社が投資し開発した環鉄芸術区は当初アトリエが中心だったが¹⁷⁾、現在は馬術クラブや設計事務所等の企業が進出している¹⁸⁾。また、今典投資不動産会社が開発した22院街芸術区は北京市のCBD地区(Beijing Central Business District)という経済活動に有利な場所に位置している。この三つの芸術区からは、民間企業が開発したものは、利益を優先するために、進出する施設の内容を変化させて迅速に対応していることがわかる。

北京市政府が開発したのは観音堂芸術区、周口店国際芸術区、首鋼創意産業区の3箇所である。北京市政府は「文化創意産業」の施策が決定した直後の2006年に、中国におけるギャラリーの拠点「中国第一画廊街」を目指して「観音堂文化大道」を開発した¹⁹⁾。南西部の郊外にある「周口店国際芸術区」は「北京(房山区)歴史、文化、観光聚集エリア」の一部として位置づけられ、北東部に集中する芸術区を分散させる狙いがあったとされている²⁰⁾。

(ii) 形成要因と分布(図-2)

2005年までと2006年以降に形成された芸術区の分布は図-2のとおりである。

2005年までに形成した芸術区は合計11ヶ所で、このうち作家が自発的に集まったものが9箇所と8割を越えている。もっとも古い円明園画家村は北京市の北西にあるが、その他は北京市北東部(朝陽区、東-北四環周辺)に集中していることがわかる。この場所は酒仙橋の北東に隣接し、もとは工業用地、建設用地、農地、林地などさまざまな用途に利用されていた地域で²¹⁾、1995年に朝陽区に移転した国立の美術大学である中央美術学院が位置している。さらに、2000年に798芸術区ができたことでその周辺地域へと芸術区が広がったと考えられる。北京市の都市計画では空港と北京市の中心を結ぶ軸線上にあるが、マルチセンターや産業地域などの特別な位置付けはされていない²²⁾。

2006年以降は民間企業が開発した芸術区が約6割と最も多く、以前の芸術区が集まっていた798芸術区を中心とする朝陽区から北京市の中心部に向かって増加し、北京市政府が開発したものは市の東、南西の郊外にそれぞれ分布している。

現代美術市場の活性化にともなってギャラリーが集中した798芸術区や草場地芸術区では、芸術活動の展開や、画商やコレクターとのコンタクトが容易という空間的なメリットがある。このため北京市政府の芸術区を分散させたいという意図に反して、北東部の朝陽区に芸術区が集まる傾向にあると考えられる。さらに、民間企業が開発したものが2005年以前の芸術区が集まっていた地域から北京市街に向けて拡大したのは「芸術区」や「文化創意産業」が不動産開発の動機になり、利便性や経済性が優先されたためである。例えば、北京市中心部の雍和芸術区は不動産投資会社、22号院街芸術区は不動産開発会社が開発、運営している。一方、北京市政府による芸術区は他の芸術区からは離れたところに位置

表－1 北京市の芸術区の概要

	廃止	形成動機			建物			管理組織			
		作家	企業	北京市政府	工場／倉庫	民家	新設	民間企業	行政	民間＋行政	不明
2005年まで (n=11)	3	9(3)	2	0	2	4(3)	5	3(1)	3	1	4(2)
%	27.3	81.8	18.2	0.0	18.2	36.4	45.5	27.3	27.3	9.1	36.4
2006年以降 (n=20)	2	4	13(2)	3	8	0	12(2)	12	0	4(1)	4(1)
%	10.0	20.0	65.0	15.0	40.0	0.0	60.0	60.0	0.0	20.0	20.0
合計 (n=31)	5	13(3)	15(2)	3	10	4(3)	17	15(1)	3	5	8
%	16.1	41.9	48.4	9.7	32.3	12.9	54.8	48.4	9.7	16.1	25.8

* ()は廃止された芸術区の件数

(単位:件)

している。これはすでに述べたように政策の一環としてつくられたことに起因していると考えられる。

(3) 建物および管理組織

2005年以前と2006年以降をあわせると、芸術区は798芸術区に代表されるように工場や民家を転用したものが全体の約45%を占め、55%は新しい建物を建設している(表-1)。工場を転用したものには後述する798芸術区が有名だが、そのほかに酒廠芸術区の酒造工場を利用した事例がある。民家を利用したのは円明園画家村や黒橋芸術区、宋荘画家村などである。新設には、著名なアーティストである艾未未がデザインした草場地芸術区や不動産業者がアトリエとして開発した蔣府芸術区などがある。

2005年までにできた芸術区のうち、工場や民家を転用したものが合わせて6件あり、全体(11件)の約半分以上、55%を占める。一方、2006年以降は6割の芸術区が新設されている(表-1)。形成動機と建物の関係を見ると、民家を利用している4箇所はすべて作家が自発的に集まってできた芸術区でありそのうち3箇所が廃止されていることがわかる(表-2)。民家を利用したのは、コストを抑える目的で既存の建物を活用したためであると考えられる。廃止の理由はすでに述べたとおり建物が直接の要因ではないが、初期の芸術区が「場」としては不安定なものであったことがわかる。作家が自発的に集まった芸術区で工場を活用したものは798芸術区1カ所のみであり、新設は8カ所ある。これは、2006年から現代美術市場が高騰し、芸術のもたらす経済的な利益が重視されたこと、政府の政策的な支援がはじまったことで、形成動機にかかわらず芸術区が多く新設されたためであると考えられる。

表-2 北京市の芸術区の形成動機と建物

形成動機	工場／倉庫	民家	新設	計
作家	1	4 (3)	8	13 (3)
企業	7	0	8 (2)	15 (2)
北京市政府	2	0	1	3
計	10	4 (3)	17 (2)	31 (5)

* ()は廃止された芸術区の件数

(単位:件)

表-3 北京市の芸術区の形成動機と管理主体

形成動機	民間企業	行政	民間＋行政	不明	計
作家	1 (1)	3	2	7 (2)	13 (3)
企業	12 (1)	0	2 (1)	1	15 (2)
北京市政府	2	0	1	0	3
計	15 (2)	3	5 (1)	8 (2)	31 (5)

* ()は廃止された芸術区の件数

(単位:件)

管理は約半数は民間企業が行っている。北京市政府が作った2ヶ所の芸術区(観音堂芸術区、周口店芸術区)は民間企業が管理し、首鋼創意産業園のみは民間と行政である(表-3)。観音堂芸術区は2006年に北京市朝陽区政府が建設した芸術区であり、北京新觀堂投資有限公司が運営管理を行っている。国営製鋼工場である首都鋼鉄廠は、北京市政府が創意文化産業園として移転した工場の建物の再利用を計画し、2013年から北京市石景山区政府と首鋼会社が合同で管理している²³⁾。また、作家が自発的に集まった芸術区、例えば798芸術区は企業と行政、草場地芸術区は行政にそれぞれ管理されている。成立した要因と管理主体はかならずしも一致していないことがわかる。

3. 798 芸術区

(1) 概要

798芸術区は北京市の北東の朝陽区に位置し、北京市中心部にある天安門から約15km離れている。敷地面積は約23haである(図-3)。工場の特徴的な建物を活用した施設が知られている(写真-1)。1957年に建設された「718 聯合廠」という軍事工場だった建物が電子部品会社に払い下げられた際に大規模なリストラが実施され、1996年に賃貸がはじまった²⁴⁾。その直前の1995年に中央美術学院は北京市中心部から北東部の「望京」エリアへ移転することになり、798芸術区に隣接した「無線電二廠」が一時的に臨時校舎として使用された。その後中央美術学院の教員が798芸術区の施設をアトリエとして使用したのをきっかけに、多くの芸術家が利用するようになった²⁵⁾(表-2)。

798芸術区構内の施設は「芸術関連」および「芸術以外」に分けることができる。「芸術関連」は、ギャラリー、芸術センター、アトリエなど芸術を直接対象とする施設である。「芸術以外」には、

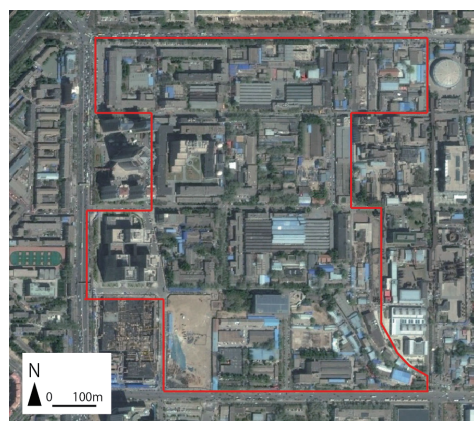


図-3 798 芸術区の範囲²⁶⁾

2013年8月現地調査及び google earth (2015年8月12日参照)より作成

飲食や、書店、衣料品店、記念品などの物販、および印刷、配送業など間接的に芸術と関わる施設がある。既往研究と現地調査から芸術関連施設の割合の変化を示したのが図-4である。798芸術区の芸術関連施設の割合は減少し、芸術以外の飲食店や物販店などの施設が増加していることがわかる。現地調査によると、2013年8月時点で798芸術区には394件の施設があり、そのうち芸術関連施設は159件(約41%)である。アトリエは3件²⁷⁾、ギャラリー156件、飲食店55件、物販73件、その他107件である。

(2) 管理運営主体の変遷(表-4)

(i) 作家による運営と電子センター建設への反対運動(～2005年)

1990年代末はすでに述べたように中央美術学院の教員などの作家が自主的に集まってアトリエや倉庫として工場を借りている状況で、統一された管理体制はできていなかった²⁸⁾。

2001年には「797廠」,「718廠」,「798廠」,「706廠」,「707廠」の五つの工場が、新しく設立された国有企業「北京七星華電科技集団有限責任公司」(以下「七星集団」とする)によって、管理されることになった²⁸⁾。2002年以降、アメリカ、ヨーロッパなど国外のギャラリーや物販店が次々に進出したが、電機メーカーである「七星集団」が引き続き管理を担当し、芸術という側面からは2006年までは政府非公認のエリアだった。

2003年に「七星集団」は「798廠」を含むエリアに「電子センター」の建設を計画した³⁰⁾。この計画に対し798芸術区の保護を求めて、作家らによる北京市政府への意見書提出、当時の北京市人大代表の李象群による北京市人民代表大会への議案提出などの運動が展開された³¹⁾。同2003年、中国政府による「文化産業」に関する政策支援の開始を受けて、2006年に北京市計画委員会と北京市工業促進局が連携して産業遺産の活用を示した「北京利用工業遺産資源発展文化創意産業指導意見」及び「北京工業遺産資源保護と再利用導則」という文書を公布した³²⁾。このように各方面からはたつきかけによって立ち退きが中止になった。この間にも、ドイツやイタリア、日本の画廊が進出している。

(ii) 政府による保護と芸術の「産業」化(2006年～2009年)

2006年に798芸術区は朝陽区政府及び北京市政府に「文化創意産業区」と認定された。同時に北京市朝陽区宣伝部(区行政)及び「七星集団」(企業)が共同で「798芸術区建設管理オフィス」を設立し、国が規定する「文化創意産業」としての管理が始まった。「798芸術区建設管理オフィス」は「798芸術区を牽引し、サービス向上に関する事業にも力を入れた。(略)本来の工業生産事業から文化創意産業への転換に成功した。」と評価された³³⁾。朝陽区という地方行政が芸術区の管理に参加する事は、すなわち芸術関係者たちが自発的に798芸術区に集まった時代の終結を表すもので、798芸術区は政府に保護されると同時にコントロールが始まった。刘によると、2005年に103件だった施設の総数は2006年に203件に増加したということである³⁴⁾。同2006年に、朝陽区が「北京798芸術区管理方法」,「芸術区産業発展重点指南」を公布し³⁵⁾、798芸術区に進出する施設を文化芸術産業に限定したが、その後も観光施設の進出は続いた。これは、「文化芸術産業」の定義が明確ではなかったことが要因であると考えられる。

2007年12月には芸術区の「798文化創意産業投資株式有限会社」が設立された。この会社は国有企業「七星集団」の子会社で、798芸術区の管理運営を専門にする会社である³⁶⁾。798芸術区の区画整理や賃貸事業、芸術区の宣伝、記念品の開発、イベントの企画運営を担当している³⁷⁾。

2008年には北京市委宣伝部による「798芸術基金」が始まり、「798芸術祭」のブランド化、融資、補助事業に使われるようになった。当初は「798芸術区建設管理オフィス」が基金事業を担当したが³⁸⁾、その後「798芸術基金」は北京市委宣伝部の基金組織である「北京文化発展基金」に統合されたため、798芸術祭に経済

的な支援を継続しているのかは不明である。

(iii) 「798管理委員会」設置による監理強化(2010年～)

もっとも大きな変化は2010年に朝陽区政府の出先機関である「798管理委員会」が設置されたことである。この「798管理委員会」は朝陽区政府6名および「七星集団」1名をふくむ38名の組織である³⁹⁾。この設置に伴って「798芸術区建設管理オフィス」は廃止された。そして「798管理委員会」は行政の立場からパブリックスペースに設置する作品や、芸術祭などの大規模なアートイベントに参加する作品を監理するようになった⁴⁰⁾。朝陽区党書記の陳綱(2010年当時)は「798芸術区は中国現代芸術の窓口として、我が国の改革開放の成果や、文化発展の魅力を世界に発信した。」と評価した⁴¹⁾。しかし、管理組織が変わることで賃貸契約などに混乱が生じ、又貸しが横行した結果、ギャラリーが契約を中止され、飲食施設や販売店に転じた例もあるという⁴²⁾。

聞き取り調査によると、作家は「観光地になってからは雰囲気が変わってしまったため、知り合いの展覧会のため見に行く以外はあまり行かない」というコメントがあった⁴³⁾。ギャラリーの関係者からは「798芸術区が有名なので、客が集まりやすい⁴⁴⁾」,「家賃が高騰し、管理側のサービスは不十分であり、作品の審査制度は展覧会の企画に負担を強いている⁴⁵⁾」などの意見があった。

以上のように、管理運営主体は作家個人から国有企業へ、さらに地方行政へと変化し、結果的に現代芸術の表現が監理下に置かれたが、一方で政府の働きかけや基金による経済的な支援によって芸術区が存続したことが明らかになった。

(4) 雑誌記事にみる798芸術区の位置づけの変化

中国検索サイト「中国知網」で「798芸術区」をキーワードで検索した記事の中から、798芸術区そのものを論点としている記事⁴⁷⁾211件を対象として、798芸術区の何が注目され、課題とな



写真-1 798芸術区(2013年3月 著者撮影)

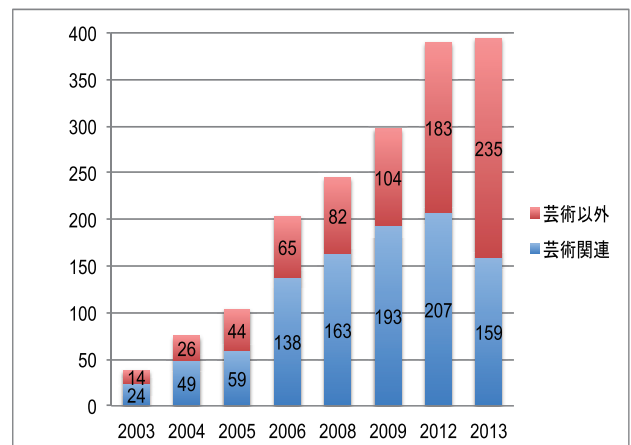


図-4 798芸術区構内の施設数の変化⁴⁶⁾

表-4 798 芸術区の変遷

	関係する 管理主体			施設および管理運営	活動など	社会・芸術背景
	北京市	朝陽区	「七星集団」			
1957				軍事工場として建設される	東ドイツ副総理が建設の式典に出席	東ドイツによる中国への援助がはじまる
1996				工場建物の賃貸開始	中央美術学院が国から大型彫刻を受注し、教員らのアトリエとしての利用が始まる	アンダーグラウンドに中国現代美術市場が形成され始める
2001			○	北京七星華電科技集団有限責任公司(国有企業「七星集団」)設立	于凡、隋建国などの作家の進出開始	
2002				電子センター建設計画	アメリカ人 Rbert Bernell「東八時区」書店出店 東京画廊「B.T.A.P.」(798 初の外資系ギャラリー) 開設	
2003						中国政府による「文化産業」に関する政策支援の開始
2004					「空白空間」(ドイツ)、「常青画廊」(イタリア)、「程昕東中国当代芸術空間」(イタリア・中国) 開設 第1回大山子芸術祭開催(作家主体)	
2006	○			文化創意産業区認定(北京市)	「紅門画廊」(オーストラリア)、「北京当代唐人芸術センター」(中国) 開設	中国の現代芸術への国際的な認知度が高くなる 中央政府が「文化創意産業」に対する政策的な支援を開始
		○	○	798 芸術区建設管理オフィス設立(朝陽区宣伝部及び七星集団の共同)	フランスから100名の若手作家が798 芸術区を訪問	
		○		「北京利用工業遺産資源発展文化創意産業指導意見」「北京工業遺産資源保護と再利用導則」(北京市計画委員会と北京市工業促進局)の公布	アムステルダム市長 Job Cohen 氏来訪 ヘルシンキ市長 Jussi Pajunen 氏来訪	
			○	「北京798 芸術区管理方法」、「芸術区産業発展重点指南」公布(朝陽区)		
2007			○	798 文化創意産業有限公司(「七星集団」の子会社で国有企業)設立(区画整理や賃貸事業、芸術区の宣伝、記念品の開発、イベントの企画運営)	芸術祭の名称が「798 芸術祭」に、主催者は「798 芸術区管理委員会」と「朝陽区」に変化 芸術施設「The Ullens Center for Contemporary Art」(UCCA) 開設	中国現代美術が銀行(民生銀行)の投資項目に加えられる
2008	○			798 芸術基金の主体が「七星集団」から北京市に移行(現在は北京市宣伝部に所属)		北京オリンピック開催
2010		○	○	798 芸術区建設管理オフィス(2006年)が廃止され、798 管理委員会を設置(朝陽区政府、「七星集団」)。使用契約業務作品の監理など	「798 国際児童芸術祭」開始(「798 管理委員会」「七星物業」、「赤薔薇白薔薇芸術センター」の共催)	国際金融危機(2009)(リーマンショック) 国家研究機関「中国現代芸術研究院」成立(2009)政府と芸術関係者との積極的な協力体制の構築へ
2011					「798 芸術祭」のキュレーターによる企画が廃止され「798 芸術区管理委員会」「北京文化発展基金会」「北京市朝陽区文化相違産業発展センター」が企画および主催へ 「青年芸術100」(美大生などを対象)開催	若手作家の作品市場の拡大

*○は各年の「施設および管理運営」に記載された出来事の関係主体。「七星集団」は国有企業「北京七星華電科技集団有限責任公司」の略

ているのかを把握した。211件の主な雑誌名と件数は表-5のとおりである。

雑誌記事の件数をみると、2006年の11件が2007年には24件と2倍以上に増加したことがわかる(図-5)。2008年は2007年とほぼ同じである。これは2006年の国の「文化創意産業」の政策、2000点以上の中国現代美術を収蔵しているNPO芸術施設「The Ullens Center for Contemporary Art」(UCCA)が2007年にオープンしたことに加え、北京オリンピックの前で外国資本の流入がピークを迎えたことが要因であると考えられる。

雑誌記事の内容は大きく4つに分類することができた。もっとも多かったのは社会的な側面を論じた記事で、81件あり、芸術区の問題、芸術区の役割、芸術と社会の関係などをとりあげている(以下「社会関連」)。次に現代芸術に影響を与えたイベント、展覧会等の記事(以下「展覧会等」)で64件、三番目は芸術区全体がどのようなものか紹介した記事(以下「芸術区の紹介」)35件、もっとも少なかったのは投資や売買など経済に関連する記事(以下「経済関連」)であった。それぞれの2003年以降の記事の件数の変化は図-5のとおりである。2007年、2008年は「展覧会」が多く、2009年以降は「社会問題」が増加していることがわかる。

「芸術区の紹介」は2003年、2004年、2006年、2007年は年に4~6件ある。内容は芸術区そのものの紹介、産業遺産の活用事例としての評価、798で活動する作家の紹介である。この時期は現代芸術の総合施設として芸術区を紹介している。2003年の紹介記事は多くが美術の専門家向けではなく、一般に向けて芸術区がどのような役割を果たすようになるかを伝える内容である。たとえば、『北京記事』は798芸術区の工場の歴史や現状を紹介し、中国の現代文化の発展が重要であるとしたうえで、「798芸術区が将来北京の現代芸術の中心になる可能性」について言及した⁴⁸⁾。また、『中国質量報』は「798芸術区はソーホーのように地価が上昇しアーティストが居られなくなるだろう」ということを予言した⁴⁹⁾。

この予言は2007年以後に現実となり、「社会問題」として扱われることになる。たとえば、2008年の美術専門雑誌『芸術と投資』の記事では「多くのアトリエが地価の上昇によって郊外に移転することになった」⁵⁰⁾と指摘された。その後2009年以降は「社会問題」に関する記事の割合が増加した。「社会問題」は芸術区の問題、芸術区の役割、芸術と社会の関係などがある。件数が多い年はそれぞれ2009年(10件)、2012年(14件)、2013年(11件)と2014年(13件)である。特に798芸術区の過度な商業化や現代美術への悪影響を指摘する記事が多く見られる。例えば、2009年の『美術観察』は「中国各地で『海賊版798』(798の真似をした芸術区)が乱立、有名作家を模倣する作品が増加し、創造性が失われた」と記した⁵¹⁾。2012年には、『美術観察』が「理想的な芸術区」というテーマで連載した。それによると、取材された作家らは理想とする芸術区の条件として、「安定した環境」、「継続可能な場所」、「現代美術への支援」、「専門的な管理」、「審美可能な空間」をあげた⁵²⁾。2012年『美術大観』は「798芸術区の過度の商業化や、歴史的建造物の行き過ぎた改造の一方で、歴史そのものを伝える博物館がない」という問題を指摘した⁵³⁾。2013年以後は芸術区の役割や問題点を以前より客観的に検討する内容がみられる。芸術区の商業化を容認した上で、798芸術区がもたらした効果や今後の展望を提唱した。例えば、2013年『東方芸術』が取材したギャラリーの経営者である房方は、「798は大衆への現代美術の普及に非常に有利である」と述べた⁵⁴⁾。2014年の『美術観察』は「芸術区は都市の発達や商業の影響、政策とは分離できない」と述べたうえで「各方面の利益を考慮して、現行の制度の枠内で芸術区の方角性を検討することが必要」と提唱した⁵⁵⁾。

芸術市場に関する記事は2007年以降増加した。国際オークシヨ

表-5 分析対象と内容

雑誌名	雑誌の発行年	芸術区の紹介	展覧会等	社会関連	経済関連	合計(件)
東方芸術	1980~	9	30	28	9	76
芸術市場	2002~	2	7	7	12	28
芸術と投資	2006~2012	3	8	9	8	28
北京規画建設	1987~	5	2	13	0	20
美術観察	1981~	1	5	13	0	19
その他	-	15	12	11	2	40
合計(件)		35	64	81	31	211

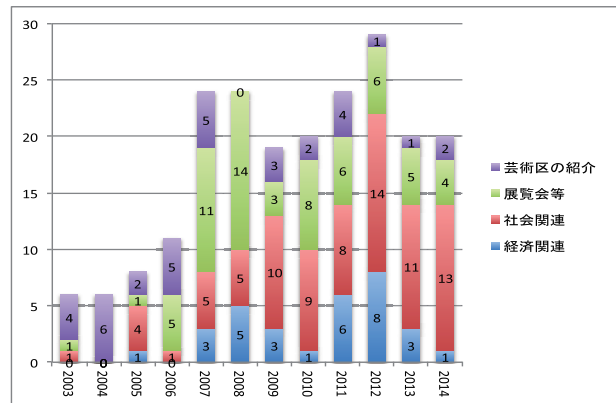


図-5 雑誌記事の内容と件数の推移

ンの好調や北京オリンピックの影響が考えられる⁵⁶⁾。2009年からは一転して世界金融危機による芸術市場の低迷が続いたが、その後2011年から若手作家の進出や多様な経営方式などの工夫により市場が回復したと言われている⁵⁷⁾。798芸術区が国際的な経済状況に影響されて現代美術市場の動きを反映していることがわかる。

全体をみると、芸術区が形成された当初の2003年、2004年はおもに「798芸術区とは何か」という紹介が主であった。とくに2004年には、798芸術区の立ち退き問題がおこったため、建物の価値や作家の意見、保護の提案など様々な視点からの評価が掲載された⁵⁸⁾。2005年からは芸術区の役割の検討が始まった。例えば『北京規画建設』には「芸術区の形成によって文化力が向上し、文化産業の発展を促す」という意見が掲載された⁵⁹⁾。2006年から展覧会に関する記事が増加し、2007年、2008年にはもっとも多くなっている。これは前に述べたように、2006年から国の政策が始まったこと、北京オリンピックの影響、798芸術区への外資系の芸術施設の進出や、その影響を受けた中国ギャラリー進出による中国現代美術市場のバブルの萌芽などが連動して背景となっていると考えられる。またこれらは「芸術市場」にも直接影響を与えている。2009年以前の「社会問題」は主に芸術区の効果について紹介したもので否定的な意見は少ないが、2009年以後は商業化などの問題に対して批判が多い。これは管理組織の役割の不明確さや方針の不備が反映していると考えられる。2008年以前に、政府は798芸術区の立ち退きの撤回、芸術区建設、管理企業である「七星集団」との交渉などに積極的な役割を果たしたが、現代美術を「産業」と見なして経済性を重視し観光化を促進した結果⁶⁰⁾、2009年前後の世界金融危機の影響を受け様々な問題が起こるようになったといえる。

4. おわりに

本研究は北京市に形成した芸術区の立地の変遷と798芸術区の

管理運営および位置付けの変遷を明らかにした。形成のきっかけは当初は作家が自発的に集まったものだったが、2006年の政策によって、企業が開発した芸術区が増加し、北京の芸術区の分布は大きく変化した。また、798芸術区は現代芸術の場として、北京市北東の芸術区が集合地域の形成の拠点となった。798芸術区がある朝陽区政府は2006年から芸術区の支援や管理などの政策、方針を定めてきた実績があったため、周辺にも芸術区が相次いで形成された要因にもなったと考えられる。さらに、北京市の他の行政区もこの影響を受けて芸術区を開発し、現在の配置となった。

798芸術区は現代芸術の場として、最初は作家が個別に進出し、創作—展示—販売というつながりを求めてギャラリーなど芸術関連の施設が集まってきた。その後政府が介入し区画整理によって一般の来訪者向けの施設が進出し観光地化が進んだ。管理は作家から区や国有企業に変化した。雑誌記事の分析からも芸術区が当初は作家らによる役割の明確化が進められたが、政府の介入によって文化施策の拠点として位置付けられるようになり、さらには経済的な投資や経済市場の場として変化したことが明らかになった。現代芸術が政策的に支援の対象として位置付けられることによって政治的な主張を包含した当初の現代芸術の場としての芸術区の位置付けは変化したといえる。

このような変化に伴い本研究では以下のような問題点を明らかにした。まず、芸術区の管理主体が変化したことで、管理組織（行政と企業）の分担や方針が不明確になり、芸術関連施設の流出や、契約関係の混乱、観光施設の増加など過度な商業化が促進された。次に、行政が管理に介入したため、当初作家が集まってできた初期の芸術区は政治的な要因で解散し、本来政治的なメッセージや社会を批判する媒体であった現代芸術が、現代美術に対する理解が不十分なまま政府に監視されるようになった。文化創意「産業」という位置付けで芸術区を管理したため、例えばソフトの開発や観光業など同じように利便性や経済性を優先するという矛盾が生じた。これらは、現代芸術の抱える根本的な問題点であるとも言える。しかし作家が集まってできた初期の芸術区と異なり、政府による関与は798芸術区の存続を促し、一般大衆への現代芸術の普及にも貢献したと評価されている。

芸術区の中には酒廠芸術区や環鉄芸術区のように民間企業が利益を優先するために、管理方針を転換し、業務内容や進出施設が変化したところも少なくない。芸術区が存続するためには、現代芸術の特徴を踏まえて「文化創意産業」の定義や分類をさらに明確にしたうえで、現代芸術の自主性を尊重できるように芸術区独自の方針や支援方策を定めることが望ましい。そのためには、現代美術領域の専門家が管理に参画すること、管理組織である政府や企業の役割を明確にし、現代美術にふさわしい芸術区の方針を検討することが必要である。

補注及び引用文献

- 1) 牧陽一 (2007) : 中国現代アート : 講談社, 23-24
- 2) 国家「十一五」時期文化發展規画綱要 : 中華人民共和國中央人民政府ホームページ
< http://www.gov.cn/jrzq/2006-09/13/content_388046.htm > 2006.09.13 更新, 2013.12.20 参照
- 3) 魏鵬挙 (2010) : 芸術集合区と中国現代文化生態 : 文芸研究 (5) 133-138
- 4) 大岡亜沙美・川島和彦・市橋彩子 (2009) : 中国・北京市における芸術区の形成過程と実態に関する研究 : 日本建築学会学術講演梗概集, 253-254
大岡亜沙美・市橋彩子・山崎喬・川島和彦 (2009) : 中国・北京市における「芸術区」の形成過程と実態に関する研究 : 日本建築学会関東支部研究報告集 II (79), 161-164
- 5) 王屹 (2012) : 観光資源としての中国当代アート—北京アートファクトリーの事例からの考察 : Core Ethics (8), 445-459
- 6) 例えば、牧陽一 (2007) : 中国現代アートの現状と課題 (現代中国のポピュラーカルチャー) — (サブカルチャーの諸相) : アジア遊学 (97),

- 162-171, 前掲1), など
- 7) 陳炯 (2011) : 芸術区形態研究 : 中央美術学院建築学院博士論文 (未公開) 3-15
- 8) 主な雑誌, 新聞誌および補足として18誌を用いた。中国質量報, 北京紀事, 北京日報, 時代建築, 美術之友, 北京規則建築, 東方芸術, 芸術市場, 美術觀察, 投資北京, 芸術と投資, 当代芸術と投資, 芸術評論, 中国芸術, 天津美術学院学報, 芸術と設計 (理論), 大衆文芸, 收藏
- 9) 芸術区の管理者 (1名), ギャラリーの関係者 (4名), 若手作家 (6名), その他キュレーター (1名) の計12名
- 10) 劉明亮 (2012) : 芸術区の解構と建構—北京798芸術区田野調査筆記 : 内モンゴル大学美術学院学報 9(1) 11-18
- 11) 姜吉佳 (2010) : 北京当代芸術家聚落生成と發展体系に関する研究 : 北京建築工程学院修士論文 (未公開) 15-22
- 12) 朝日新聞 (2010年02月23日朝刊) 「北京郊外で100人が襲撃, 邦人も負傷 再開発計画中の芸術区」
- 13) 前掲1), 46-49
- 14) 熊焰 (2011) : 中国現代芸術における円明園画家村の位置づけ : 芸術時代, 164-168
- 15) 財経時報 (2006年11月27日刊) 酒場 : 五環そばの画家村
- 16) 盧可非 (2013) : 酒廠芸術区の危機と転換 : hi 芸術ネット記事 <<http://www.hiart.cn/news/detail/a0dcpzp.html>> 2013年1月27日更新, 2015年7月26日参照
- 17) 中国文化報 (2007年10月14日刊) 環鉄芸術区 : どんな特色で發展するのか?
- 18) 張宗希 (2014) : 環鉄芸術区 : 新しい都会古い記憶中の試験場 : 東方芸術 (1) 50-51
- 19) 王静 (2006) : 京城観音堂文化大道陽春五月正式に開街 : 東方芸術 (9) 25
- 20) 北京市房山区委宣傳ホームページ <http://xchb.bjfh.gov.cn/homepage/article_display.jsp?id=1255> 2010年11月15日更新, 2015年4月24日参照
- 21) 北京市朝陽区土地利用総合計画 2002-2010, 中国政府公開情報オンラインサービス北京 <http://govinfo.nlc.gov.cn/bjzf/xxgk/bjsgtj/201010/t20101009_425283.html?classid=373> 2008.2.21更新, 2015.4.15参照
- 22) Zou Deci (2006) China City Planning Review, Vol.15, No.1 pp.91
- 23) 証券時報 (2014年5月29日版) 首鋼外遷 : 京津冀一体化先行者の困難融合
- 24) 孔建華 (2009) : 北京798芸術区發展研究 : 新視野 (1), 27-30
- 25) 劉伯英・李匡 (2010) : 北京工業建築遺產保護及び再利用の体系に関する研究 : 建築学報 (12), 1-6
- 26) 芸術区の範囲は明確ではなため, 2103年に現地で入手した798芸術区の観光マップおよび踏査の結果から図を作成した。
- 27) 2014年798の管理委員会主任を取材した記事によると (東方朝報ネット記事 (2014年7月30日) 「北京798 : 誰が芸術区の未来の責任をとるのか?」 <<http://www.dfdaily.com/html/8759/2014/7/30/1170975.shtml>> 2014年7月30日更新, 2015年4月23日参照), 「約20人の作家が制作活動をしている」としているが, 本研究では2013年の現地調査による目視での確認によって3件とした
- 28) 前掲7)
- 29) 黃銳 (2008) : 北京798 再創造の工場 : 四川出版社, 四川美術出版社, 190
- 30) 中国経済導報 (2010年8月12日刊) 「798を守る : 電子センターから芸術区へ」
- 31) 黃銳 (2008) : 北京798 再創造の工場 : 四川出版社, 四川美術出版社, 191
- 32) 前掲21)
- 33) 人民日報 (2010年9月20日刊) 「北京798, 創意の花が咲く」
- 34) 前掲7)
- 35) 京華時報 (2006年9月19日刊) 「798芸術区の進出条件を設定する」
- 36) 北京青年報 (2007年9月24日刊) 「北京市798芸術区の計画 : 倍に拡大」
- 37) 北京電子持株責任有限公司ホームページ <<http://www.behc.com.cn/information/news/111123/>> 2011.11.23更新 2013.12.21参照
- 38) 前掲27)
- 39) 朝陽区政府ホームページ <http://www.bjchy.gov.cn/affair/caizhengsz/czyjs/8a24fe8343d74b6b01448c05c8671b30.html> 2015.8.15参照
- 40) 東方朝報ネット記事798管理委員会副主任劉鋼インタビュー : 芸術区内毎年10件ほど経営者が変わる事が正常だ <<http://www.dfdaily.com/html/8759/2014/7/30/1170974.shtml>> 2014.7.30更新 2015.4.15参照
- 41) 前掲27)
- 42) 東方朝報 (2013年8月26日刊) 「798芸術区の転賃現象」
- 43) 若手作家苑氏, 劉氏 (当時2013年) へのヒアリングより
- 44) SOKA ギャラリー管理者 (当時2013年) L氏へのヒアリングより

- 45) 三瀨画廊スタッフ（当時 2013 年）H 氏へのヒアリングより
- 46) データ出典：2003 年—2009 年：劉明亮（2012）：芸術区の解構と建構—北京 798 芸術区田野調査筆記：内モンゴル大学美術学院学報 9(1) 11-18；2012 年：羅忠学（2012）：798 芸術生態調査：投資と理財（9）76-78；2013 年：筆者の現地調査より作成した。
- 47) 記事は、観光案内、インテリアデザインのディテール、個々の展覧会または作品のみの紹介を除いたものとした
- 48) 「誰が我々の 798 工場を塗っているの？」（2003）北京記事、(Z26) 48-51
- 49) 中国質量報（2003 年 5 月 23 日刊）「798：北京の SOHO」
- 50) 宋逸（2008）：アトリエはどうすればいいのか：芸術と投資（2）46
- 51) 劉永涛（2009）：私たちは「海賊版 798」がいくつか必要なのか：美術観察（7）22-23
- 52) 謝墨涼・樊林・黄洋等（2012）：理想な芸術区シリーズ：美術観察（10）15-21
- 53) 劉卉（2012）：798 芸術区の興衰及び持続可能な発展：美術大観（8）81
- 54) 張滄洋（2013）：房方—文化のランドマークを離れ、アートはそれぞれ発展する：東方芸術（19）65-67
- 55) 邢莉莉（2014）：芸術区、芸術のみではない：美術観察（3）27
- 56) 芸術と投資雑誌編集部（2008）：オリンピック効果下の 798 画廊：芸術と投資（6）30-33
- 57) 羅忠学（2012）：専門收藏家と若者の最愛：芸術市場（16）136-137
- 58) 舒東平（2004）：798 芸術区からみる近、現代建造物の保護：北京規画建設（4），180-184
許檳（2004）：798 政協提案：北京規画建設（5），178-180
- 59) 張宝全（2005）：芸術区の形成は文化自信の象徴：北京規画建設（5）105
- 60) 東方朝報ネット記事（2014 年 7 月 30 日）「北京 798：誰が芸術区の未来の責任をとるのか？」
<<http://www.dfdaily.com/html/8759/2014/7/30/1170975.shtml>>2014 年 7 月 30 日更新，2015 年 4 月 23 日参照
(2015.4.29 受付，2016.2.18 受理)